

招待席

里村 欣三

さとむら きんぞう 小説家 1902.3.13 - 1945.2.23 岡山県和気郡に生まれる。前半生を徴兵忌避逃亡者としても過ごしたが、軍報道班員に徴用されマレー戦線従軍後にボルネオを探検。帰国して『北ボルネオ紀行 河の民』などを著した後、今日出海と共に再び報道班員として、今度は敗色濃いフィリピンに送られてルソン島で戦死したとみられる。掲載作は、満州放浪の体験から、いわゆる「底辺」を這う者の実存的な姿と意識を実態としてとらえた出世作、大正十五年(1925)「文藝戦線」六月号初出に拠る。

苦力頭(クーリーがしら)の表情

ふと、目と目がカチ合った。はッと思う隙(ひま)もなく、女は白い歯をみせて、につこり笑った。俺はまつたく面喰つて臆病に眼を伏せたが、咄嗟(とつさ)に思い返して眼をあけた。すると女は、美しい歯並からころげ落ちる微笑を、白い指さきに軽くうけてさッと俺に投げつけた。指の金が往來を越えて、五月の陽にピカリと躍った。

俺は苦笑して地ベタに視線をさけた。街路樹の影が、午さがりの陽ざしにくろぐろと落ちていた。石ころを二つ三つよごれた靴で蹴とばしているうちにしみじみ、

いゝ女だなア

と、浮気ばい根性がうず痒(かゆ)く動いて来た。眼をあげると、女はペンキの剥げたドアにもたれて、凝(じ)つと媚(こび)を含んだ眼をこちらに向けていた。緑色のリボンで、ちゞれた髪を額から鉢巻のように結んだ、目の大きい、脊のスラリとした頬の紅い女であつた。俺が顔をあげたのを知ると、女は笑つて手招きした。俺はかぶりを振つて、澄ました顔をした。すると女は怒つて、やさしい拳骨を鼻の頭に翳(かざ)して睨(ね)めつけた。

青草を枕に寝転んでいた露西亞(ロシア)人が、俺の肩を肱(ひじ)で小突いて指で固い形をこしらえて、中指を動かしてみせた。そしてへ、へえ、へえと笑

つた。

よし！

と、俺は快活に、小半日もヘタバっていた倉庫の空地から尻を払って起きあがつた。そして灰のような埃を蹴たてて往来を横切つた。俺の背中に、露人が草原から何か叫んで高く笑つた。

女は近づいてみると、思つたよりフケて、眉を刷(は)いた眼元に小皺がよつていた。白い指に、あくどい金指輪の色が長い流浪の淫売生活を物語っているような気がした。女は笑つて俺を抱いた。ペンキの剥げた粗末な木造の家であつた。

ドアを押すと、三角なヴァイオリンに似た楽器を弾いて踊っていた女達が、俺の闖入(ちんにゅう)に驚いて踊をやめた。そしてばたばたと隅ツこの固い木椅子に腰を投げて、まじまじと俺を凝視(みつ)めた。

朝鮮人(カウリー)か日本人(ヤポンスキー)か？

女達はリボンの女にこう訊ねたに違いないが、女は何も答えずに、俺をひき寄せてみんなの前でチュウと、唇を吸つた。

女達は口々に囁(はや)したてて笑つた。俺は一足とびに寢室のベットを目蒐(めが)けて転んだ。……

女は俺が厭がるのに無理やりに服をぬがせて……。黄色く貧弱な肌が、女のにくらべてひどく羞しい気がした。女は笑つて、俺の汗臭い靴下を窓に捨てた。窓には、芽をふいた青い平原が白い雲を浮遊させて、無限の圧迫を加えていた。

陽はまだ高かつた。

俺は放浪の自由を感じて、女の胸に顔をうずめて、やわ肌の甘酸ばい匂いを貪(むさぼ)つた。

顔をあげると、女は何か言つてひどく笑いくずれた。俺はキョトンとして女の笑い崩れる歯ぐきに見とれた。女は二三度その言葉を繰返したが、俺が、キョトンとしているので、しまいにはジレて荒ぼく俺の顔をつかんで唇を押しつけた。

俺は何のことが解らなかつた。女は暗い顔をして、俺をみつめた。

俺は女の眼をさけて、窓をみた。言葉の通じない悲哀が襲つて来たのだ。

と、涯(はて)しのない緑の平原と雲の色が、放浪の孤独とやるせなさにむせんで見えた。俺は吐息(といき)をついて女をみた。

女はブラインドをひいて、窓の景色を鎖(と)ざした。ドアの外でまた女達が、楽器の音に賑かに踊り出した。

女は俺を抱きしめて頬に唇を寄せた。俺は黙つて女の……。だが心

が滅入(めい)つて性慾が起きなかつた。

俺は女を突いてウォツカをコップにつがせた。酒の酔は俺から陰気な想念を追払つた。酔いの眼に女の裸体が悩ましくなつた。俺は女を揺(ゆす)ぶつて……。

女は柔かい肉体の全部を惜し気もなく俺の破レン恥な翻弄にゆだねて眼をつむつた。……に……を……すると女は微笑んで俺に唇を求めた。だが俺はその苦痛にゆがんだ無理な微笑に気がつくとはつと手をひいた。酔がさめて、女の白い屍肉が、一箇の崇巖な人間の姿になつた。

女は眼をひらくと、不審な眼付で俺をみつめていたが、やがてまた手を掴んで俺の獸慾を挑発しようとした。俺は人間をみずに、また忽ち淫売婦を感じた。俺は泣くに泣かれぬ気持で、後にノケ反つて頭髪を搔きむしつた。俺という醜劣きわまる野郎と、淫売婦というどこまで自己を虐げるのかケジメのたゞない怪物を一緒に打ち殺したい憎悪で部屋が闇黒になつた。

闇の中で女は俺をひき寄せた。俺は邪険にその手を払つて、眼をつむつた。

眼をひらくと、女はうつ伏して嗚咽(おえつ)していた。俺は何とも云えない可憐な気持に打たれた。女を抱き起して、唇を与えた。

女は涙の眼を微笑んで、……。俺は淫売の稼業を思つた。

内地である女郎屋へあがつた時、俺の對手(あいて)に出た妓(おんな)は馬鹿に醜かつた。俺はヤケを起してその女に床をつけなかつた。と、ヤリテ婆が出て来て、

あんたはん、この妓(こ)に床をつけてやつておくんなはれ、でないと女郎屋の規則としてお金とる訳に行きませんよつて

と、泣かんばかりで妓を庇護したことがある。そのかたわらで、醜い顔の女が、寒むそうに肩をすぼめて泣いた。

俺はそれを思つた。俺はかつてゴム靴の工場で働いたことがある。一日中、重い型を、ボイラーの中に抛り込んだりひきずり出したりして一分間の油も売らず正直に働いた。そしてその上に、鹹(くび)になるまいと思つてどれだけ監督に媚びへつらつたのだつたか！ 淫売婦と俺のシミタレ根性との間にどれだけ差違があるろう。俺も喰わんがためには人一倍に働いて、しかもその上に媚を売っている。浅薄(あさはか)なる者よ 俺の心が叫んだ。

俺はよけようとした女の膝を、心よく受けた。俺は快樂に酔つた。この快樂を放浪者に与える淫売婦もまた尊い犠牲者であると感じた。女は……を、……に隠した。

莧(たばこ)に火をつけた。女は俺の顔をみて、にやりと笑つた。俺は女の無邪氣な皮肉を眼の色に感じた。

ドアをロックする音がした。女は驚いてベッドの敷布を体に巻きつけると、急いでドアの鍵をはずした。猶太(ユダヤ)の赤い顔のおかみが、女にカードを渡した。そして何か言った。女はそれを俺に示して、テーブルの上の銅貨を拾ってみせた。

俺は皺ばんだ紙幣をベッドの上にひろげて、女にいゝだけ取れと手真似した。

女は時計を描いて、時間表をつくつて二時間を示すと、紙幣の中から二圓とつた。そしてその金をおかみのポケットにねじ込んだ。猿のような赭ら顔のおかみは、にこつきもせず、ドアを閉めて去つた。女は敷布をはずして、水色の服に着更えると、乱れ髪を繕つた。

俺はもう出て行かなければならないことを悟つた。だが俺には出て行くところがなかつた。こゝを無理に出てみたところで、不潔な見知らぬ街と、言葉の通じない薄汚ない支那人と亡命の露西亞人に出喰わすだけのことだ。言葉ができない俺には宿屋は勿論、ろくすつぽ一碗の飯にもありつけないことは解つている。俺は今朝、こゝの停車場に吐き出されたばかりなのだ。的(あて)もないのに盲滅法に歩きとばして脚の疲れた儘に、とある倉庫の空地をみつけて、つい小半日もヘタバッテいる間に偶然この女を見つけた訳だ。

無鉄砲な男よ

ふとこんな気がした。言葉も解らない、そして何の的のある訳でもないのに、何故こういう土地に乱暴に飛び出して来たかと思つた。が俺にも無論その理由が解らなかつた。

たゞ気の向くまゝに

おゝそうだ。気の向くまゝに放浪さえしていれば、俺には希望があつた、光明があつた。放浪をやめて、一つ土地に一つ仕事にものゝ半年も辛抱することが出来ないのが、俺の性分であつた。人にコキ使われて、自己の魂を売ることが俺には南京蟲のように厭だつた。人の顔色をみ、人の気持を考えて、しかも心にもない媚を売つて働かなければならないことは、俺にはどうしても辛抱のならないことだつた。だが、しかし不幸なる事に人間は霞(かすみ)を喰つて生きる術(すべ)がない。絶食したつて三日と続かない。とゞのつまりは、やはり人にコキ使つて貰つて生きなければならぬ勘定になる。他人をコキ使おうツて奴には虫の好く野郎は一匹だつてない。そこでまた俺は放浪する。食うに困るとまた就職する。放浪する、就職する、放浪する、就職する……無限の連鎖だ！

生きるためには食わなければならぬ。食うためには人に使われなければならぬ。それが労働者の運命だ。どこの国へ行こうとも、このことだけは間違いッこのないことだ。お前ももういゝ加減に放浪をやめて、一つ土地で一つ仕事に辛抱しろ。どこまで藻掻(もが)いても同じことだ

と、友達の一人は忠告した、俺もそうだと思つた。　だがしかし俺にはその我慢がない。悲しい不幸な病である。俺はいつかこの病気で放浪のはてに野倒(のた)れるに違いない。

ふと、気がついてみると、女は固い木椅子に腰かけていた。言葉で云つても解らないので、俺が出て行くのを静かに待つていたのであろう。俺は考えた。多くもありもしない金だ。どのみち今日一晩に費い果して明日から路頭に迷うのも、また二三日さきで路頭に迷うのも同じ結果だ。同じ運命に立つなら、寧(むし)ろ一日も早く捨身になつて始末をつける方が好い　と。

そこで俺は紙片に、時計の画をかいて、手真似で一昼夜とまつて行くという意味を女に通じた。その意味が解つたのか、女は高い歓声をあげて俺に抱きついた。

女は俺の財布から七圓とつた。後では大洋(タイヤン)で二圓と少しばかりの小銭が残つているばかりであつたが俺は鬱血を一時に切り開いた時のような晴々しさを覚えた。この北満の奥地で運命を試すことは如何にも痛快なことではないか　俺は窓のブラインドをはねあげた。と、緑の曠野は血のような落日を浴びていた。風の動く影もない、肅殺たる光景である。俺の魂は落日の曠野を目蒐(めが)けて飛躍した。どこかで豚の啼き声がした。

表には、こゝの女たちが男を誘惑する淫(みだ)らな嬌声が聞えていた。その嬌声に混つて、胡弓の音がした。俺は何故ともなしにその弾き手を盲目の支那人であろうと思つた。女は茶をいれた。

熱い、甘い茶を唇で吹きながらスプーンで俺に含ますのである。ひとりで自由に呑もうとすると、女は俺の手を軽く遮えぎつた。そのやさしい手つきに、俺はふと母親の慈愛を感じた。

俺は生みの母親を知らなかつた。

お牧婆は、三十過ぎても子供がなかつた。人知れず彼女は子持地藏に願をかけていた。その時分は、まだ若く今のように皺苦茶な梅干婆ではなかつた。

彼女はある雪の晩に、貰い風呂から帰る途で、暗い地藏堂の縁の下に子供の泣き声をきいて、これはテッキリ地藏様の御利益(ごりやく)に違いないと思つた。そこで提灯の明りと子供の声をたよりにのぞいてみると、すぐ足の下に蜘蛛の巣を被(かぶ)つて、若い髪の乱れた女がねんねごに子供を負(おぶ)つて打伏していた。流石(さすが)におまき婆も顔色を変えて、

これ、お女中よ、これお女中よ

と、我れにもなく声はずませた。が、女はその声にふり起きもしなかつた。背中の子供が人の気配に、火のように泣き出した。おまき婆は堪まりかねて、子供のくるまつたねんねごを擦(さす)ろうとして女の頸に触つた。おまき婆は

ぞつと縮み上つた！ 女が氷のように冷たくなつていたからだ。

背中の子は俺だつた。どうして俺が助かつたものか？ 母親が凍死したのであるとすれば、俺も一緒に死んでいなければならない筈だが……………

俺はお牧を母として育つた。お牧の亭主は幸四郎という百姓だつた。

俺が物心ついた頃、村の餓鬼が俺を「乞食の子」と呼んだ。俺は何よりもそれが悲しかつた。泣いてその訳を母にせがんだ。母は隠しおえるものでないと知つてか、何時もとは違つた正しい容子(ようす)で、

お前のおふくろは確かに地藏堂の縁の下で死んだのじやが、どうしてどうして乞食どころかえ、旅疲れこそはあつたが若けえ立派な嫁御であつたぞえ。着ているもんでも、こがいな田舎では見られない綺麗な衣裳をつけえとつたがのう。どこかの旦那衆の嫁御に違えねえののだが、何処の誰れであるかどがいしても知れなんだ。さぞ親御や旦那は捜していられるであろうが、それにお前という立派な男の子もあつたのじやけに

と涙ながらに打ち明けた。その時から母がおまき婆になつた。父と思つていたのはアカの他人の百姓であつた。

俺はひがんだひねくれ者になつた。俺は愛のない孤児だと悟つたからだ！ おまき婆は育て甲斐がないと失望した。幸四郎は飯の喰い方が悪いとか、働かないとか云つて、事ごとに殴りつけた。

俺は愛に渴した。十六で五つも年上の娘と恋に落ちた。そして村一統の指弾の的標(まと)になつた。

血は争えないものだ。お前のおふくろもお前と同じに肩あげのとれない内から不義に落ちて、お前を負つてこの村へ流れて来て地藏堂の縁の下に野倒死(のたれじ)にしたんじや！ 男の尻を追つて行く途中か、それとも不義のお前という餓鬼をヒッて家に居たゝまらず逃げ出した果てが、この地藏堂の野倒死にか、どつちかまあ解らんが、子が子なら親も親じやろうつて

お牧婆は口を極めて俺を罵つた。俺は遂に十七の歳に村を捨てて遁げ出した。放浪がそれから始まつた。だが俺はまだ母親のように野倒死にはしない。世の中の間人は、誰れでも皆かならず二つの愛を所有している。父の愛と母の愛だ！ 俺もついにそれなしには生きていられない寂しさを思う。

俺の母親は中國の僻村(へきそん)で地藏堂の縁の下に死んだが、父親はまだ何処かに生きて居るべき筈だ。おまき婆が言うように不義な恋から生みつけられた俺にしる、父は父であるべき筈だ。俺は常に父親を思う だが父親は俺を子と知らずに、世の中の人達と同じく俺を虐げてはいまいか。そして俺が考えるように父親は俺から遠く離れたところに居るのではなく、案外に俺の間近かで交渉のある人であるかも知れない こう考えると遂に俺は人を憎めなくなる。人を憎もうとすればその顔が父になり、また反対に愛そうとする顔は冷

酷な他人の顔に早変わりする。実に奇怪な錯覚である。俺がテロリストにもなれず、また人道主義者にもなれないのはこのためだ！ 俺は常に、憎むべき者を憎み得ず、また愛すべきものを愛し得ない悩みに悶える。この悩みがまた常に錯覚を伴う。

俺は女を抱いて、しみじみ母親の愛を感じていた。……

言葉を知らない女は、たゞ笑つて、俺を行為で愛撫するより仕方がなかつたのだらう。それが俺に更に、母親の慈愛を錯覚せしめた。俺は夢のように三日三夜を女の懐の中で暮らした。

三日目の朝、女は俺の財布を振つて外を指した。財布の底はコトリとも音をたてなかつた。俺は悲しい眼差(まなざし)で女をみた。が、女は笑おうともしなかつた。俺は遂に、うまうまと欺かれた俺を知つた。泣きも泣けもしない気持であつた。

窓には、曠原のバラ色の朝焼が映つていた。女の寝不足な、白粉落ちのした顔は、俺にヘドを催させた。年増女に不似合な緑色のリボン、水色の洋服、どうみたくて淫売婦だ！ 俺はこう云う女に三日三晩も抱きつかれていゝ気になつて母親の夢をみていたことを悔いた。畜生！ 俺はこう心に叫ぶと、女を尻眼にかけて淫売宿をオン出た。

眼がさめると夕暮であつた。五月というのに薄寒かつた。

俺は支那街の、薄汚い豚の骨や硝子(ガラス)のカケラの転がった空地に寝込んでいたのだ。さんざ歩きとばしたことだけが思い出せた。みると俺の周囲に得体の知れない薄気味の悪い支那人が輪になつて、何か声高く饒舌(しゃべ)つていた。

安心しろ、まだ野倒死はしないよ 俺はこう思つて、笑つた。支那人の輪が遠のいた。腹の空いたことが解つた。考えてみると淫売宿で三日三晩ろくすつぽ飯も喰つていなかつた。 どうしよう と、思つたが、扱(さ)てどうもすることが出来ない。言葉の解らない支那人を眺めて、つくづく悄気(しよげ)切つたものだ。腹の空いた真似をして、膝をたゝいてみせたりすばめてみせたりすると、支那人は手を叩いて笑つた。

気がつくつと、空地の向うに五六人の苦力(クーリー)がエンコして何か喰つていた。俺は立ちあがつて、そこに行つた。辮髪(べんぱつ)をトグロのように巻た不潔な野郎が、大きなマントウを頬張つているのだ。つい俺もその旨そうに喰つている様子に唾が出て、黙つて黄色ばいマントウに汚(き)たない布片(ぬのきれ)をもたげて手を出した。すると前にいた苦力が、獐猛(どうもう)な獣の吼(ほえ)るような叫び声を出して俺の手を払い退けた。

そうやられると、俺も無理に手を出しかねた。黙つて佇んだ。苦力達は俺の

顔を睨(ね)めつけて、何かペチャクチャと囁き合った。

やがて彼等は食器を片付けて、小屋のような房子(フアンズ)に引きあげた。俺もその後について行つた。彼等と一緒に働こうと思つたのだ。俺が入ると、暗い土間のところでアバタ面(づら)の一際獰猛な苦力頭(クーリーかしら)が、
何んだ！ 何者だ というように眼をむいて叫んだ。俺はびつくりして、一足二足あとへすさつたが、また考え直してにやにや笑いかけて図太く土間に進んだ。俺はスコップで穴を掘る真似をして、働かして貰い度いものだという意味を通じた。が、苦力頭は俺の肩を掴かんで、外を指さした。出て行けというのだ。しかし俺は出て行くところはない。かぶりを振つてその隅にヘタバリ付いた。

苦力頭は仕方がないとも云うような顔で、自分の腰掛に腰を据えて薄暗いランプの灯で、プリキの杯(はい)で酒を嘗(な)めはじめた。他の苦力達が、俺を不思議そうに寝床の中から凝視(みつ)めた。

あくる朝、鶏に柵の上から糞をヒツかけられて眼を覚ました。苦力頭が、棒切れで豚のように寝込んでいる苦力どもを突き起して廻つた。あちらこちらで大きな欠伸(あくび)がして、どやどやと皆起き出た。

苦力頭の女房らしいピンツケで髪を固めているような、不格好な女がマントウやら葱(ねぎ)やら唐黍(とうきび)の粥(かゆ)のようなものを土器(かわらけ)のような容れものに盛つて、五分板の上に膳立てをしていた。そして頻(しき)りに俺を睨(にら)みつけた。

苦力頭は、鼻もヒツカケない面付(つらつき)で俺を冷たく無視した。苦力達がさんざ朝飯を食い始めたが、誰も俺にマントウの一片(ひとかけ)らも突き出そうとしなかつた。俺は喰えというまで手を出すまいと覚悟した。

皆がシャベルやツルをもつて稼ぎに出だしたので、俺も一本擔(かつ)いで後に続いた。誰も何んとも言わなかつた。

仕事は道路のネボリであつた。俺はシャツ一枚になつてスコを振つた。腹が減つて眼が眩(くら)みそうであつたが、一日の我慢だと思つてヤケに精を出した。苦力達は俺の仕事に驚いた。まさか日本人に土方(どかた)という稼業はあるまいと思つたに違いない。支那に來ている日本人は皆偉そうぶつて、苦力(クーリー)を足で蹴飛ばしている訳だから。苦力頭が昼ごろ見廻りに來たが、その時も俺に見向きもしなかつた。アバタ面を虎のようにひんむいて、苦力どもを罵つていた。

昼飯の時、苦力のひとりが俺にマントウと茶椀に一杯の塩辛い漬物を食えと云つて突き出した。いくら腹が減つていても、バラバラした味気のないマントウは食えなかつた。塩辛い漬物を腹一杯に食つて、水ばかり呑んだ。

仕事を終つた時は流石(さすが)に疲れた。転げそうな体をようやく小屋に運

んだ。

苦力たちは、用意の出来ていた食物を、前の空地に運んで貪(むさぼ)りついた。一日十五六時間も働いて、日の長いのに三度の飯は腹が減るのは無理もなかつた。俺は腹が減り切っていたが、マントウには手が出なかつた、熱い湯を呑んで、大根の生まを嚙(か)じつた。そして房子に入つた。土間の入口の古い机に倚(よ)つて、酒を呑んでいた苦力頭(クーリーがしら)が俺をみて、はじめてにつこりとアバタ面を崩して笑つた。そしてブリキの盃を俺に突きつけた。俺は盃をとるかわりに腕を掴んで、

大將！ 俺を働かしてくれるか有難い と叫んだ。苦力頭は、俺の言葉にキョトンとしたが、感じ深い眼で俺を眺め、そして慰めるように肩を叩いて盃を揺ぶつた。 やがて喰い物にも慣れる。辛抱して働けよ、なア労働者には國境はないのだ、お互に働きさえすれば支那人であろうが、日本人であろうが、ちつとも関つたことはねえさ。まあ一杯過ぎて元気をつける兄弟！

苦力頭のアバタにはこんな表情が浮かんでいた。俺は涙の出るような気持で、強烈な支那酒を呷(あお)つた。

大正十五年六月「文藝戦線」